

大学総長 卒業生に平和への思い

しんぶん赤旗 2015年4月3日(金)

新年度になり、街なかや電車などで、フレッシュな姿を見かけますが、この人たちを送り出した大学の卒業式での祝辞には、熱い思いが込められていました。いくつかを紹介すると一。

「悲劇なぜ」見つめて

○…「今年は、戦後70年という特別な年です」とのべた法政大学の田中優子総長は、同大が、卒業生在学中に「学徒出陣」をテーマにしたシンポジウムと展覧会を開催したことにふれ、「戦争中は学校が閉鎖され、大学生は兵士としてかり出されました。総長である私が、『お国のため』と称してあなたがたを戦場に送ることを想像してみてください。それは現実に起こったのです」と話しました。

田中氏は、「若者に過酷な道を歩ませた責任の重みを忘れることなく、この悲劇をもたらしたものをしっかりと見つめる」と誓った前総長の「平和の誓い」を受け継ぎ、次の総長に手渡すと決意を表明。「自分だけでなく社会全体の理想の未来を思い描き、それに向かって日々の仕事を全うすること」を呼びかけました。

「裸の王様」になるな

○…京都大学の山極壽一総長は、「忘れてはならないことは、自分と考えの違う人の意見をしっかりと聞くことです。しかも複数の人の意見を踏まえ、直面している課題に最終的に自分の判断を下して立ち向かうことが必要です」と強調。「自分を支持してくる人の意見ばかりを聞いていれば、やがては裸の王様になって判断は鈍ります」と注意を促しました。

改憲の動きに警告

○…「安倍首相の憲法改正の意欲は並々ならぬものがありまして」と改憲の動きに警告を發したのは、同志社の大谷實総長です。

自民党の憲法草案が憲法に規定された「個人の尊重」という文言は改められて、「人の尊重」となっているのは、「個人主義を助長してきた嫌いがあるので改める」というものだとして、「これまで明確に否定されてきた全体主義への転換を目指している」と強調。「個人主義こそ民主主義、人権主義、平和主義を支える原点」「遅かれ早かれ憲法改正問題に直面することと存じますが、熟慮に熟慮を重ねて、最終的に判断していただきたい」と要望しています。

信州大学のホームページより

入学式のご挨拶

平成27年度入学式学長あいさつ (2015年4月4日)

寒暖の差が大きく厳しかった冬も過ぎ去り、うららかな日が続く松本でも、この二、三日降り続いた春の雨のお陰でしょうか、大学正門の脇の高遠小彼岸桜が可憐な濃いピンクの花を咲かせ始めました。人との新しい出会いの季節を迎えました。

本日ここに、平成二十七年度信州大学入学式を開催できますことは大きな喜びでございます。関係の皆様へ深く感謝を申し上げます。

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。信州大学は全学を挙げて皆様を歓迎いたします。そして、ご両親、ご家族の方々に心からお慶びを申し上げます。おめでとうございます。

皆様が本日入学式を迎えることができたのは、厳しい受験勉強を克服された努力の結果であります。と同時に、励まし頂いたご家族、ご友人そしてご指導頂いた先生はじめ多くの方々のお陰だということを改めて深く胸に刻み、感謝の気持ちをいつまでも持ち続けてください。

そして、留学生の皆様は母国を離れ、言葉、文化、生活習慣の異なる信州のこの地に生活することになりました。初志を貫徹され、四年後に大きな成果を挙げられることを期待しております。

また、信州大学大学院にご入学された皆様にも、心からお祝いを申し上げます。おめでとうございます。最高学府である大学院の入学式に臨まれて、決意を新たにされていることと存じます。今の新鮮な知的高揚感を決して忘れることなく、大学院での学びと研究を続けて頂きたいと存じます。

ところで、新入生の皆様は、本日、大学受験から解放されたことになりましたが、もう勉強はしなくて良いなどは考えていませんよね。

今までは、皆様は正解のある問題を解くことに終始していました。知識の量を試されてきました。世の中では、正解のない問題を解かなければなりません。誰も考えたことのないことを考えるという、知識の質を問われることとなります。さらに、世界の状況は変化が大きく、スピードも速く、ICTの進歩で一気にグローバル化します。

大学院入学生にも、是非聞いて頂きたいのですが、日本が今後とも活力ある社会を維持し、世界へ積極的に貢献していくためには、科学、技術、文化のいずれの分野でも独創性や個性を発揮することが重要となります。横並びの発想では問題を解決できません。

皆様は、もしかしたら、個性の発掘に没頭する「自分探し」をしませんでしたか。また、これからしようと思っていないですよ。若い時の自分探しは勧められません。特に、解剖学者の養老孟司さんは、「個性は徹底的に真似をすることから生まれる」とまでおっしゃられています。伝統芸能の世界に見られる、師匠と弟子の個性の違いを指摘されたことです。

個性を発揮するとは、なにか特別なことをするのではなく、問題や課題に対して、常に「自分で考えること」を習慣づける、決して「考えること」から逃げないことです。自分で考えると他人と違う考えになることが多くなり、個性が出てきます、豊かで創造的な発想となります。

学生で言うと、普段の勉強を真剣に取り組むこと、そして身につける「知識の量」を主とするのではなく、「知識の質」すなわち自ら探求的に考える能力を育てることが大切となります。

ところで、信州大学の学生は独創性が豊かなのでしょうか。ここに興味あるデータがあります。昨年六月の日本経済新聞の調査結果です。上場企業四三三社の人事担当者から見た「大学のイメージ」調査です。「対人力」、「知力・学力」、「独創性」などについてのランキング結果です。

信州大学は、京都大学を抑えて、「独創性」項目で第一位です。この「独創性」の判断

は「創造力がある」と「個性がある」という質問で行っているようです。

一言付け加えておきますが、信州大学は、「知力・学力」の項目でも、高位にありました。「単に変わった人間が多い」ということでは決してありません。

就職されている先輩諸氏は、「独創性」が高いという社会的評価です。皆様もそうでしょうか。卒業すると、そうなるのでしょうか。私は違うと思います。受験勉強と同じ気持ちでは駄目です。大学での勉強と生活の仕方を変えなければなりません。

その理由をお話しましょう。創造性を育てるうえで、特に、心がけなければならないことは、時間的、心理的な「ゆとり」を持つこと、ものごとにとらわれ過ぎないこと、豊か過ぎないこと、飽食でないことなどが挙げられます。

自らで考えることにじっくり時間をかけること、そして時間的にも心理的にもゆとりとすることが最も大切となります。

子供の頃をちょっと思い出して下さい。子供の頃は、例えば、夏休みがゆっくり過ぎていたと感じませんか。大人になると、忙しさで、時間は走馬灯のように速過ぎていきます。脳科学者の David Eagleman さんは「記憶が詳細なほど、その瞬間は長く感じられる。しかし、周りの世界が見慣れたものになってくると、脳が取り込む情報量は少なくて済み、時間が速く過ぎ去っていくように感じられる」と言っています。

自分の時間を有効に使うために、自力で時の流れを遅くする必要があります。

そのための五つの方策が提案されていることは良く知られています。

- 一、 学び続けること。新しい経験が得られて、時間感覚がゆっくりとなる。
- 二、 新しい場所を訪ねる。定期的に新しい環境に脳をさらす。
- 三、 新しい人に会う。他人とのコミュニケーションは脳を刺激する。
- 四、 新しいことを始める。新しい活動への挑戦。
- 五、 感動を多くする。

信州大学では、自然に囲まれた緑豊かなキャンパスでの勉学と課外活動、都会の喧騒とは無縁の落ち着いた生活空間、モノやサービスなどが溢れることのない地に足の着いた社会など、知的にものごとを考え、創造的な思考を育てる環境を簡単に手に入れることができます。先輩諸氏は、このようにして、ゆっくりとした時間の流れを作っていたのです。

皆様はどうでしょうか。残念なことですが、昨今、この信州でもモノやサービスが溢れ始めました。その代表例は、携帯電話です。アニメやゲームなどいくらでも無為に時間を潰せる機会が増えています。スマホ依存症は知性、個性、独創性にとって毒以外の何物でもありません。スマホの「見慣れた世界」にいと、脳の取り込み情報は低下し、時間が速く過ぎ去ってしまいます。

「スマホやめますか、それとも信大生やめますか」 スイッチを切って、本を読みましょう。友達と話をしましょう。そして、自分で考えることを習慣づけましょう。自分の持つ知識を総動員して、ものごとを根本から考え、全力で行動することが、独創性豊かな信大生を育てます。

最後にご紹介したいことがございます。本日の入学式では二つの歌を皆様と一緒に歌うことになっています。一つは信州大学の前身の一つである旧制松本高等学校の思誠寮寮歌「春寂寥」です。大正九年に吉田実さん（作詞）と濱徳太郎さん（作曲）の二人の学生によって作られました。

旧制松本高等学校は、大正八年(一九一九年)に開校され、その後信州大学の発足にあたりその母体の一つとなり、文理学部に改組されて昭和二十五年（一九五〇年）には閉校となりました。

文科と理科の専攻に分かれての勉強ですが、授業時間の四割が外国語、文科でも数学と自然科学が週五時間ほど課せられ、また理科でも国語及び漢文が週四時間ほど課せられる、文理の差が非常に少ないカリキュラムでありました。

ほとんどの生徒は思誠寮での寄宿生活であり、寮生活を通して、切磋琢磨により、自らの生き方を見出すという恵まれた時間をつくることができましたと言われていています。まさに独創性が育まれたということです。作家の北杜夫さん、辻邦生さん、病理学者の飯島宗一さん、日本人として初めて南極点に到達した南極観測隊々長の村山雅美さんなど各界で著名な方々が多くいらっしゃいます。

もう一つの歌は、信州大学学生歌「叡智みなぎる」です。昭和三十五年(1964年)に文理学部宮坂敏夫さん(作詞)と工学部羽毛田憲一さん(作曲)の二人の学生によって作られました。文理学部同窓会誌に、宮坂敏夫さんが書かれた「作詞の経緯」によりますと、信州大学学生部が六十年安保闘争のデモに明けくれる学生の実態を見て、学内に潤いが欲しいと思って、学生歌の募集を始めたのではないかとあります。なお、宮坂敏夫さんは、現在俳人としてご活躍でいらっしゃいます。この「叡智みなぎる」の学生歌ができた頃の学生達は、自らの勉強時間を削ってでも、日本の国の在り方と国の行く末を案じるという、熱い情熱を持って学んでいたのです。

また、この二つの歌はいずれも、松本在住の音楽家丸山嘉夫さんによって、見事に編曲され、若者たちの「青春の歌」として蘇っていることを付け加えておきます。

皆様は、一日も早く新しい生活環境に慣れ、心身ともに健全に保ち、勉学に励み、目標に向かって進んでください。大学生時代は、長い人生の中でもかけがえのない大切な時期であります。充実した楽しい大学生活を過ごされることを期待しています。

そして、大学院に入学した皆様は、自らの高い問題意識と積極的な取り組みによって、初めて真理が探究でき、新しい知の創造の喜びが生まれ、社会に貢献できることを肝に命じてください。

学術研究の将来を担うのは皆様です。信州大学の学術研究は皆様の肩にかかっています。高い志と熱い情熱を持ち続けてください。そのことによって、日本の明るい未来が開けるものと確信しております。

平成二十七年 四月 四日

信州大学長 山沢清人

信州大学 <http://www.shinshu-u.ac.jp/guidance/president/notification/entrance.html>

法政大学 2014 年度学位授与式

田中優子総長の告辞および卒業生へのメッセージ

2014 年度学位授与式 告辞 2015 年 03 月 24 日

2014 年度学位授与式 告辞 皆様、卒業おめでとうございます。保護者の皆様にも、心よりお祝い申し上げます。

ただいま入学式が執り行われましたように、皆さんの多くが入学なさった 2011 年 4 月、法政大学は入学式をおこなうことができませんでした。そのことが私たち教員にとってもたいへん心残りであり、ぜひ短くとも入学式をとりおこないたいと思っておりました。

2011年3月11日とその後、皆さんの中にはご自身や大切な方々が被災なされた方もおられることでしょう。直接の被災がなくとも、大きな衝撃を受け、さまざまなことを皆さんは考えられたことでしょう。

しかしその日乗り越え、皆さんが入学し、今日卒業を迎えました。たいへん嬉しいことです。

皆さんはどうか、この入学と卒業を、ほかの世代の誰も持ち得なかった記憶として持ち続けて下さい。2011年3月11日の記憶は、これから皆さんが生きていく原点になるものなのです。

それはなぜなのか、お話しします。

地震は自然災害です。しかしこの震災の第一の特別な意味は、原子力発電所事故という文明災害でもあった、ということです。皆さんはまだ生まれていない時代ですが、1954年、国会議員が原子力予算を国に提案しました。そして福島第一原発の誘致が1960年から始まり、運転開始は1971年でした。

私は1970年に法政大学に入学しました。その私が大学でたいへん充実した時間を過ごしていたとき、福島第一原発は稼働を始めたのです。

地震は日本列島では古代から無数に続いています。日本人はいつもそれを乗り越えて来ました。しかしこのたびの災害は、いまだに克服したとは言えません。それは、これが文明によって引き起こされた災害だからなのです。

私が生まれ育ったその時代に進められてきたことは、日本の経済成長を促しました。その結果、今では日本人の半分以上が、皆さんのように大学を卒業することができています。その上、多くの方が留学体験をしています。このことは、現在海外で起きている学校の破壊や、教育を受けられない多くの若者のことを考えると、素晴らしく恵まれたことなのです。

しかしその一方で、日本は大変な体験もしてきました。私が法政大学に入った年、ある先生が授業で石牟礼道子の『苦海浄土』の一部を朗読なさいました。その時の衝撃は今でも忘れません。水俣病の発生とその経過を書いたこの本は、今では多くの方が読んでいますので、内容はよくご存じだと思います。

この本に書かれた一連の事件が起こっているときに、各地で原子力発電所の建設が同時になされました。さらなる経済成長をするためです。そして今に至り、私たちはこの災害から再出発しなければなりません。2011年は、これからの日本を考える上で、とても重要な年なのです。

皆さんの多くは4月から社会に出ます。社会に影響を与える存在になります。どのような仕事につこうと、仕事をするということはそれ自体が、社会を創ることなのです。どうか、自分の仕事が世界をどのような方向に向けているのか、十分に学び、意識して下さい。それが、いまこそ世界が必要としている「世界市民」という存在なのです。

すでにホームページでお伝えしていますが、先月拘束されて亡くなったジャーナリストの後藤健二さんは、法政二高と本学社会学部を卒業した、皆さんの先輩です。紛争地帯の弱者によりそったその仕事は、まさに世界市民と呼ぶにふさわしい仕事でした。後藤さんが伝えたかったことは、「勝つ」ことではありません。争いの中で生きる場所を失っていく人々の存在に気がつくこと、その人々にまなざしを向けること、その立場に立ってものごとを

考えていくことでした。

後藤さんだけでなく、多くの卒業生たちが世界で活躍しています。法政大学はこれからも、力強い市民を育てていきます。市民とは、自分の生き方を社会や他の人々と結びつけて考えることのできる人です。自らの中にある差別感や偏見を乗り越え、社会の格差や問題を少しでも解決しようと、自分と社会の関係の中で行動できる人です。自立しながらも孤立することなく、多様な人々と話し合い、協力して未来を創っていくのが市民です。多くの卒業生たちが、市民として世界で活躍しています。

また今年、戦後 70 年という特別な年です。

皆さんが在学中、法政大学では「学徒出陣」をテーマにしたシンポジウムと展覧会を開催しました。戦争中は学校が閉鎖され、大学生は兵士としてかり出されました。総長である私が、「お国のため」と称してあなたがたを戦場へ送ることを想像してみてください。それは現実に起こったのです。

本学でも前総長が「平和の誓い」をいたしました。「若者に過酷な道を歩ませた責任の重みを忘れることなく、この悲劇をもたらしたものをしっかりと見つめる」と誓いました。私はこの「平和の誓い」を、総長として受け継ぎ、さらに次の総長に手渡して行こうと思います。

何よりもひとりひとりが、自分だけでなく社会全体の理想の未来を思い描き、それに向かって日々の仕事を全うすることが大切です。その未来は皆さん自身の未来です。

日本は急激な流動化の時代を迎えています。皆さんがこれから入っていく職場は、従来の日本の職場とは様変わりしている可能性があります。海外に赴任するかも知れません。日本語を話せない同僚や取引相手と、日々コミュニケーションするかも知れません。しかし法政大学を卒業できた皆さんは、必ず乗り越えて行かれます。基礎的な学力と、状況を切り抜ける柔軟性があります。自信をもって下さい。

迷ったときは、大学時代の友人やゼミの先生や、校友たちと交流して下さい。法政大学は日本各地に校友会をもち、皆さんを支えようとしています。世界各国の校友会も今後次々に組織化され、海外に出る皆さんの力になります。

厳しい時代だからこそ、協力し合うことが必要です。法政大学は中にも外にも、皆さんが頼りにできる場を創っていきます。皆さんもぜひ、それを創る力になって下さい。そして一緒に未来の社会を創りましょう。

改めてお祝い申し上げます。ご卒業、おめでとうございました。